

子どもの本だな 70

このページは子どもたちにすすめたい本をとりあげています。本を選ぶときの参考にしてください。

### ターちゃん和ペリカン

ドン・フリーマン さく

さいおんじ さちこ やく (ほるぷ出版)

ターちゃんは新しい長ぐつをはいて、海辺へ出かけました。そこへ、仲良しのペリカンがやってきて、海へひゅーんと飛びこみ魚をつかまえました。ところがターちゃんにおじぎをしたとたん、ひゅるん！魚をおとして飛んでいきました。ターちゃんがくいの上で釣りをしていると、潮が満ちてきて砂浜においていた長ぐつがプカプカ漂いはじめました。片方を釣り上げると、中には魚が入っていました。

柔らかなパステル画は海辺のようすをよく表しています。ペリカンがぐわあー！と開いた口の中に、なくしたもう片方の長ぐつが入っていた結末に、子どもたちは満足を覚えるでしょう。読んでもらえば4歳くらいから楽しめます。(西村)

### 地下の洞穴の冒険

リチャード・チャーチ 作

大塚 勇三 訳 (岩波書店)

夏休みを田舎のおじさんの家で過ごしていたジョンは、ある日、ワラビの生い茂る野原で洞穴の入り口を発見しました。ジョンは、友達4人と、ロープやハンマー、懐中電灯、磁石などを揃え、洞穴へ探検に出かけました。真っ暗なトンネルをはっていくと、驚くほど大きな空間に出ました。上にはシャンデリアのような鍾乳石。下は15メートルほど落ちこんでいます。底に向かって岩棚を降りていくと、岩壁の裂け目の先に底の見えない穴を見つけました。リーダー気取りのアランの指示で、ジョンとハロルドが、ロープで穴の底へ降りました。ところが、上からロープが全部落ちてきて、2人は仲間の元に戻れなくなりました。

洞窟内の様子が挿絵と共に細かく描かれ、想像力をかき立てられます。電気灯や懐中電灯が次々とだめになったり、リーダーと物静かな少年の立場が逆転したり、個性豊かな5人が繰り広げる緊迫感あふれる冒険を、一緒になって体験できるでしょう。10歳位から。

(池之上)

8月	9月	8・9月の移動図書館 (いずれも木曜日です)				
8日	12日	塚森 地域内 10:30~10:50	沖代 地域内 11:00~11:20	福地(三反長) 地域内 14:30~14:50	米田 公会堂 15:00~15:20	竹広南 公民館 15:30~15:50
15日	19日			原池団地 公民館 15:00~15:20	山田 掲示板前 15:30~15:50	原 太田東地区農村 交流センター 16:00~16:30
22日	26日	広坂 公民館 10:30~10:50	上太田 公民館 11:00~11:20		太子 ニュータウン 公民館 15:30~15:50	吉福 公民館 16:00~16:30

### <お知らせ>

#### 夏休み特別

#### おはなしの夕べ

ろうそくの灯りのもとで、おはなしを聞いてみませんか。『元気な仕立て屋』など、こわい話を予定しています。

日時：8月16日(金)

- ①4歳~大人 18:00~
- ②小学高学年~大人 18:30~

※途中からは入れませんので、時間までにお越しください。

※8月の定例の絵本の時間・おはなしの時間はお休みです。

# 『最後の読書』

津野 海太郎 著

新潮社 262頁 2018年11月刊 1,900円 (請求記号) 019

著者は昭和13年生まれ、この4月で81歳の評論家である。本書は、著者が79歳から80歳の1年余の間に連載した、様々な「老人読書の現状報告」を集めたものである。

第1話は「読みながら消えていく」。名うての「話す人」兼「書く人」だった鶴見俊輔が、脳梗塞によってその力のすべてを一瞬にして失った後、ただ読むことを3年半続けて亡くなったことに、著者は強いショックを受けた。自分が同じような状況に陥った場合、そこまでの意力があるかどうかと。晩年の鶴見氏が、老いに関わる印象深いことを書きつけていた『もうろく帖』に、幸田文の「書ければうれしかろうし、書けなくても習う手応えは与えられると思う」という一文を見つけた著者は、何かを目標にした読書ではなく、ただ今の自分の喜びのために読みながら、静かに一生を終える幸せを思う。

しかし、第2話では、前述の幸田文の文章中の「書く」は、ただ単に文字や文章が「書ける」というだけの意味ではないのではないかという疑問をあげ、彼女の父幸田露伴の「最後の読書」へとつながっていく。晩年の露伴は、白内障のために視力を失い、「読めない、書けない、でも話せる」状態。そこで助手を雇い、口述筆記による『芭蕉七部集』の注釈作業を完成させた。非常な読書家であるとともに、書くことや話すことで表現してきた2人の最後の読書ぶりに感嘆し、では自分は、と著者も読者も考えさせられる。ほかの章では、著者自身の読書日記あり、また、戦後まもない頃に瀬田貞二が編集した「児童百科事典」を子ども時代に楽しんだが、瀬田氏の評伝『子どもの本のよあけ』に出会って、自分の思い込みや間違いに気づいたエピソードや、同年代である天皇(現上皇)夫妻の読書や本への思いへの共感等が語られる。

1冊の本、ひとつの文章について深く考え、また広がっていく著者の思考についていきながら、次々と呼んでみたい本に出会える格好の読書案内となっている。読めば読むほど再発見があり、様々な読書家の「最後の読書」をなぞりたくなってくる。(池田)

**<お知らせ>**  
**13歳からの読書会**  
**『地下の洞穴の冒険』を読んで**  
 ・日時:10月5日(土) 14:00~15:30  
 ・場所:図書館 読書会室  
 ・対象:中学生以上(要申込)  
 ・準備:当日までに本を読んでください。

- \*カレンダーの×印は休館日
- \*■は館内整理日  
返却のみ受付(10:00~17:00)
- \*開館時間は10:00~18:00  
金曜日は20:00まで開館

**8月の開館日**

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	×	7	8	9	10
11	12	×	×	15	16	17
18	19	×	21	22	23	24
25	26	×	28	29	30	31

**9月の開館日**

日	月	火	水	木	金	土
1	2	×	4	5	6	7
8	9	×	11	12	13	14
15	16	×	×	19	20	21
22	23	×	×	26	27	28
29	30					

**地下水**

「脳が喜ぶ本だった」というHさんの感想に惹かれ、『琥珀の眼の兎』を読んでいる。私の脳が喜ばないのは、知識の幅、深さも足りなさすぎだからかと感じつつ。

先日、利用者Mさんとエラリー・クイーン『Yの悲劇』を探していると、近くにHさんがおられ、「あの本は読んでいるか」と聞いてこられた。「私の脳は喜びませんでした」と答えると、Mさんが一言「脳がノーと言っている!」。

結局、図書館では『Xの悲劇』、『Zの悲劇』はあるのに、『Yの悲劇』は欠けていた。ところが、数分後にHさんが「あったぞ」と得意げに1冊の本を持ってこられるではないか。見るとアガサ・クリステイの『ABC殺人事件』だった。XYZがABCになったと笑った。Hさんは、すぐさまその本を新刊本の棚に並べ、「この作品はドラマで放映されているからすぐに貸し出される」と自信たっぷり。ああ、そんなところにおくなんてとあきれつつ、いろんな情報をもっておられるなあと、また感心した。

書架への返却作業をしていると、ブックトラックに載っている本は、誰かが面白そうと思って借りられた本だから、と、そこから本を選ばれる利用者が多い。返却を受けたときに「これ、おもしろかった」「よかった」という感想を聞いた本をわずかがカウンター前に展示しているので、手に取ってほしい。(竹内)

